トンネル工事を見守る「化粧木」に関する一考察　「土木民族学」的なアプローチの試み

㈱ネクスコ・エンジニアリング東北　正会員　阿部公一

1.　まえがき

（社）日本トンネル専門工事業協会に加盟する会員各社の協力を得て、トンネル工事従事者社を対象にアンケート調査を行った。その結果を参考に、トンネル坑口に設置する化粧木の来歴等について検証し、トンネル工事従事者の心象の象徴である化粧木について考察した。

2. 安全祈願と化粧木・化粧木の設置

トンネル掘削工事あたっては、そのトンネル坑口には化粧木が置かれる。化粧木を置く理由は化粧木の由来と密接に関係するが、いずれ山の神への信仰や工事安全を祈る気持ちに関連していて、トンネル工事従事者のほとんどが、トンネル延長にかかわらず必要だといっている。

危険な作業空間である坑内は、それぞれが神聖な神域であり、神域の境界を示すには、各坑口に化粧木が置かれる。

さらに化粧木は山岳トンネルに限定することなく、海底トンネル工事にも置くとの意見が多く、実際に青函トンネルの工事に従事した者は、入坑する斜坑坑口に化粧木を置いたと具体的に証言している。一方、シールドなどの都市トンネルには一般に化粧木を置かないとの回答が複数あるが、その実態や理由は把握できていない。

写真－1　化粧木の例(常磐自動車原町トンネル工事)

このトンネル坑口に置かれる木材は、「化粧木」の呼び名の他に、稀に「飾り木」や「おしぎ」、「神木」とも呼ばれることがあるようだが、圧倒的に「化粧木」と呼ばれることが多い。

この化粧木をなぜ「化粧木」と呼ぶのかとの疑問には、アンケート回答者による「斧指（よきさし）という職人が丹精込めて木を磨き、反りをつけて化粧するから」、「つるつるに木を鏡のように磨くから」、「山の神は女性で、山の神のいる坑口を飾るから」との回答が自然で納得しやすい。

3. 化粧木の来歴

トンネル工事従事者が語る化粧木の来歴について、神域の入り口を表象する「鳥居」だとする説や神様が降臨するための「依代」だとする説が代表的だ。

3.1　神域の入り口を表象する「鳥居」

アンケート調査の回答者の中に、化粧木の来歴を「鳥居」だとする意見が圧倒的に多い。

鳥居は神社の内と外を分ける境に立てられ、族界と聖界とを分ける表象であるいう。山の神は、トンネル坑内の一番奥にいて、その坑内は神聖な神域であって、坑口に置かれる化粧木は鳥居と同じく、神域の入り口を示す表象というのだ。

鳥居の形態は、二本の柱の上に笠木・島木を載せ、その下に貫を入れて柱を連結したものを基本としている。頂部にある笠木・島木が上部に反り返っていることを反増(そりまし)というが、化粧木の形状は、反増のついた笠木の形と酷似している。

写真－2　宇佐鳥居を模したという化粧木(N 氏提供)

昭和 30 年代に写したトンネル坑口の写真には、丸太材で捨て枠を組み、その上に坑口幅と同じ長さの化粧木を置き、さらに化粧木の中央に神棚を据えている様子が写って

ｷｰﾜｰﾄﾞ：トンネル、化粧木、アンケート調査、山の神、鳥居、依代
k.abe.td@e-nexco.co.jp

いる。まさに化粧木は反増のついた「笠木」・「島木」に、その下にある水平丸太材は「貫」に相当し、全体の形状はまさしく鳥居にそっくりで、化粧木は「鳥居」の象徴だとする意見を納得させる

写真の提供者は、明治時代に炭鉱の導坑掘削に腕を振るいその後「豊後土工」と呼ばれたトンネル坑夫の技能集団が、彼らの出身地である大分県上浦町の宇佐神宮の宇佐鳥居の形を模したのが、全国に広まったと述べている。

3.2 山の神の神霊が憑き宿る「依代」

山の神をはじめとする神が俗界に降下するには、岩石や高い木、あるいは二股の木などの自然物、柱、呪物などが神の招代(まねきしろ)や依代(よりしろ)になるといわれる。[1)]

そもそも神は、目に見えない存在であり、その神霊は人間の世界に常在することはない。そのため神意を知るには、神が降臨し神霊が依り憑き宿る所すなわち「依代」を用意して、神霊を招き寄せる必要がある。そうして依代に神霊が顕現するという。[2)]

化粧木を作製するのに、最近はその資材を製材所に頼っているが、かつてはトンネル掘削する山の木を用いたといい、このことは祭礼が行われる際、山の神は山から伐り出された若木に依(よ)って里に下りてくるという話にも重なる。[3)]

また、化粧木の上に米俵を載せたり、さらに坑口付け(安全祈願)の際に使用した御幣や神主の「祓え串」を置くこともある。この御幣や祓え串も山の神が降臨する依代である。このことは、天上にある山の神は、祭祀の時など人間の求めに応じて化粧木ないしそこに添えられた御幣や祓え串を依代にして下りてくると考えることができる。

昭和 50 年 3 月に供用開始した中央自動車恵那山トンネルの工事には、化粧木を置かず、その代りに小さな木製の社(やしろ)を置いた。この社には山の神が祀られていたと考えられる。かつては山の神が坐す社を置いたが、同様な気持ちが化粧木にも込められていると考えても不思議ではない。実際に、あるトンネルの建設工事では、毎月、月初めに化粧木に水と榊を供えたという証言があり、山の神が坐す社と化粧木との間に、坑夫達の気持ちに、差はほとんどなかったと思われる。現在では、化粧木の上にさらに社を置いて念の入った工事現場もある。

山の神は始終この化粧木に依り憑いたり「社」に坐して、工事従事者を見守っていると考えられる。

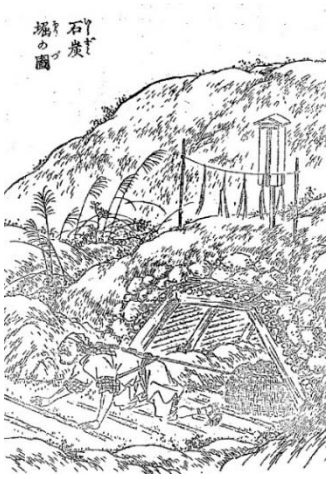
3.3 神社の象徴・勝男木(カツオ木)とする説、その他

アンケート回答者の中に、化粧木の来歴を神社社殿の勝男木(かつおぎ)に求める意見がある。勝男木は堅魚木、鰹木などとも書き、神社建築の屋上にある棟木と直交に横並びした棒状の単材のことである。勝男木は鳥居と同様に神社の神聖さを象徴していて、山の神の存在を示す記号を予感させる。アンケート調査対象の四分の一の人も何がしかの間連を認めていて、「伊勢神宮本殿の屋根の飾り木を模倣している」とする意見が複数あるが、伊勢神宮に限定する由縁は説明されていない。

このほかにも、「兜の飾り」、「刃」、「船」、「神様の角」、「ゴボウ締めの注連縄飾り」といった意見や、化粧木は松丸太の皮をむいて製作するのに関連付けて「男根」を隠喩しているなど、様々な説があり、決して単純ではない。

4. 江戸時代の炭坑に見る坑口との関連性

寛政十年(1789)頃の筑前の炭掘りの記事を収めた「兼葭堂雑録」に「石炭掘(いしずみほり)の図」が収録されている。そこには、坑口の上に二本の短い竹が立てられ、この間にしめ縄が張ってあり、しめなわの後に、木造りの祠が置かれている様子が描写している。



図－1 「石炭堀の図」[4)]

当時既に石炭を専門に掘る坑夫が専業化していた。彼らは坑口にしめ縄や祠を置いて、身の安全を祈願していて、現在のトンネル坑口上の化粧木に通じる雰囲気を感じさせられる。

＜参考資料＞

1) 萩原秀三郎、「地下他界　蒼き神々の系譜」工作舎、1985,7
2) 戸部民夫、「日本の神々」、新紀元社、1998,11
3) 佐々木高明、「山の神と日本人」、洋泉社、2006,2
4)「日本随筆全集第五巻」に収められた「兼葭堂雑録　巻之五」兼葭堂こと木村孔恭著